

先週の回答



ぼくは地元の市役所の文書課に勤めて三年目、二十五歳で独身です。文書課の仕事は今や、書類の作成・管理・保管はすべてコンピュータがやってくれるので、ぼくの仕事はほとんどありません。うららかな春の日射しの中、窓辺のデスクでやることもなく鼻毛をぬいていると、鬼頭課長が、ゴホン、ゴホンと空咳をしてぼくをにらみます。

鬼頭課長はパソコンが嫌い（使えなくて）昔のままの手書きがなつかしいのです。習性として何かしてないと気がすまないのか、始終細かい字で何かを手帳に書き込んでいるんです。何もしないで鼻毛をぬいているぼくにイラつくのです。

でも女好きなんです課長は。アンコー

とダボハゼをかけ合わせたような顔をしながら、駅前のクラブ「ハイビスカス」のあけみママに惚れているんです。

ママは昔の山本富士子と宮沢りえを足して三で割ったような美人でグラママーです。

「いらつしゃーい、課長さーん。お待ちしていたのよーん」にジャガ芋が溶けたようなグズグズな顔になって、

「いやー、ママ。忙しくってさびしい思いをさせてしまったなあ、ははは」とアンコー+ダボハゼはママもおしぼりで顔をごしごしするんです。

「万年くん、好きなもの飲みなさい」。言い忘れましたが、ぼくの名前は万年波太郎。二十五歳、独身はさつきいいましたね。

じつは、ここだけの話。ぼくもあけみママに惚れているんです。モーレッツに。何しろ色っぽいだけでなく、何て言うんですか、女のたしなみ、触らなば落ちなんの女のはかなさも兼ねそなえた女性なんです。ぼくなんかの手の届かない女（ひと）なんです。

それがですよ。課長が鬼の霍乱カゼで役所を休んだ日に一人で「ハイビスカス」に行ったときのことです。

よーせばよかったよーよせばよかったけれど。BGMは裕ちゃんの「ブランデーグラス」。店内はママと二人つき

り。ブランデーをしたたか飲んだママが細い指を口に当ててくつくつ笑いながらうるんだ瞳で呟いたんです。

「あたし波ちゃん（ぼくのことです）にホの字なの。鬼頭なんて大ッ嫌い！今夜は帰さないわよ」

「えっ」

ブランデーグラスにブランデーがまた満たされ、ママの妖しくうごめく唇が迫ってきたんです。熱い口づけを交わしながら、これは現（うつ）か幻かと、ぼくは夢心地で頬をつねった。

ユメではないかと つねってみたら
田んぼの中で 目を覚ます



今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。